

わしをけがしてくれるな。わしはきたない溝の中でゆるゆると泳ぎまわるのが愉快なのだ。国をもつ者に縛られることなく、一生仕えず、わしの心のままにしているまでだ」

▼このように莊子の生き方は、名利を望まず、悠悠自適に自分の心のままに暮らす生き方であった。

(荒川 美枝子)

補説④

○『菅家文草』における「風情」の考察

▼「94 勸吟詩、寄紀秀才。元慶以来、有識之士、或公或私、争好論議、立義不堅、謂之癡鈍、其外只醉舞狂歌、罵辱凌轢而已。故製此篇」に「風情斷織壁池波、更怪通儒四面多」の句が見え、ここでは、道真は「風情」について、「(学問に対する)胸中の思い」と、いう意味で使用している。

▼「305 对残菊詠所懐、寄物忠両才子」に「不知籬下菊開残、風情用筆臨時泣」の句が見え、ここでは、「風情」は「胸中の思い」の意で使っている。

▼「419 客館書懐、同賦交字、呈渤海裴令大使」に、「雪鬢同年分岸老、風情一道望雲交」の句が見え、ここでは「優雅な味わい」の意で使っている。

▼一方、「432 行幸後朝、憶雲林院勝趣、戲呈吏部紀侍郎」では、「従来勝境屬風情、専夜相思夢不成」の見え、ここでも、「優雅な味わい」の意で使っている。